



2017年・秋季号・No.36

8月6日と下駄箱の靴と	日原 美由紀	1
ピックアップインタビュー 丸山 穂高	桑名 一恵	2
エクソフォニーと違和感と文学研究	トート・ユリアンナ・ニコレット	4
留学生vs.大阪弁	ウイラキ・アレクサンドラ	6
目指すは「ゆったり観察」	渡辺 薫	8
思い出の夏と今年の夏	岡本 聡子	9
錦織選手の再起を祈る	盛田 常夫	10
ブダペスト日本人学校	坂井 圭子	12
	柴田 果凜、寺岡 愛実	13

GERE

GERE ATTILA PINCÉSZETE

ハンガリー・ヴィッラーニ地方の赤ブドウ加工品

GEREワイナリー製品

無添加自然加工(自然の恵みもの)
ポリフェノミクロン(商標登録申請中)



100% SZŐLŐMAG OLAJ

シードオイル(箱付き、250ml)

ポリフェノールと不飽和脂肪酸を含んだ赤ブドウの極上低温圧搾シードオイル

成分構成: 不飽和脂肪酸 min. 80%, ポリフェノール min. 6%

使用法: サラダなどの冷たい食べ物に直接かけたり、パンへ直接かけて、ほのかな香りを楽しみ、食欲を増進。

1日の摂取量: 小さじ1杯(およそ5g)を毎朝、可能な限り、空腹時に摂取するのが望ましい。



**SZŐLŐMAG & HÉJ
MIKROŐRLEMÉNY**
種子と果皮のマイクロ粉末
(ポリフェノミクロン)
(カプセル180個)



100% SZŐLŐMAG OLAJ/ KÉKSZŐLŐMAG & HÉJ

シードオイル&ポリフェノミクロンセット
(化粧箱入り)



KÉKSZŐLŐMAG & HÉJ

種子と皮の粉
(缶入り一徳用缶、150g)

ポリフェノールをふんだんに含む有機栽培赤ブドウの種子と果皮を粉砕したマイクロ粉末

ポリフェノール成分: 5gの粉末はおよそ250mgのポリフェノールを含む。

使用法: 粉末をそのまま食することは避け、ヨーグルトなどに混ぜて食する。

1日の摂取量: 1日に小さじ1杯の粉末を2回に分けて摂取。

小売の問い合わせ: gere-club-japan@gmail.com

GEREワイナリー製品 通販サイト: www.gere-club-japan.com

8月6日と下駄箱の靴と

日原 美由紀

夏休みは日本へ一時帰国し、なつかしい家族や親せき、友人たちと楽しい時間を過ごすことが我が家の恒例となっています。ハンガリーカレンダーで生活する息子にとっては学年を修了し1年間がんばったご褒美であり、わたしたち夫婦にとっては怒濤の日々から完全に解放され、1年間分のエネルギーを蓄える大切な時間でもあります。

そんな中、毎年8月6日は、家族で広島を訪ねます。現在両親は他県に暮らしていますが、広島は私を育ててくれた場所であり、ことに8月6日は特別な日であるからです。

8月6日は、広島の場合は登校日となっているので、町の中ではあまり子どもの姿を見かけません。ある年、わたしたちは小さな息子と一緒に平和の灯の前に並んでいたのですが、あまりにも暑くて、息子が「あつい、あつい」と言ってぐずり始めました。これといった日よけもなく、やっぱりこの列から外れようか、どうしようかと迷っていた時、前にならんでいたおばあさんが、くると向いて、「小さいのによく来たね。これを首に当ててごらん」と言って、冷たいペットボトルの水をくれました。

この水は、おばあさんが自分で飲もうと持ってきたものではありません。わたしは知っています。この水は、8月6日「あつい、あつい」と言って、水をほしがって川に向かい、亡くなっていった人たちへの献水にしようとしていたことを。もしかしたら、おばあさんの家族が水を求めていたのかもしれない。仲よしの友だちが、そうして亡くなっていったのかもしれない。または、そのような話を聞いただけなのかもしれません。息子の「あつい、あつい」が8月6日にこたました「あつい、あつい」の叫びに重なったのかもしれないと、わたしには思えてなりません。いずれにしろ、大切な水を見ず

知らずの小さい子にくださったおばあさんの姿に、「ああ、これが平和というものなのだ」と思ったことを、今もよく思い出します。

今年も息子に「そんなことがあったね。」と話しました。しかし、当時幼かった彼には、その記憶はどこにもありません。



さて、職場の下駄箱で、かかとがこちらを向いて並んでいる靴たちの中で、わたしの靴は、つま先が前に向いています。青春時代を3年間、広島の子寮で過ごしましたが、そこでは、靴の入れ方はつま先が前と厳しく指導され、わたしは今でもその習慣から抜け出せずにいます。

その寮は、伝統を重んじる凜とした世界で、中高生が日常を謳歌するには、似つかわしくない場に思えました。掃除は1日2回。「トイレ掃除」は美しさを欠く言葉で禁句であり、代わりに「おすいれん」と言います。布団をしまう時には、縦にたたんでから横折り。さらに、押し入れにならんだ布団は、折った輪のところにひだをとって、シワひとつないようにカバーをなでつけて「布団なおし」を毎朝します。洗濯は、大判のものではない限り、洗濯板で手洗い。壁のフックにあるハンガーにかけた服は背中を手前にかけて、そして袖部分ははみ出さないように壁側へ折り込みます。毎朝、登校後には「お主婦さん」と呼ばれる上級生グループが、各部屋に乱れがないか点検を・・・と、ひと晩飲みながら語り明かしてもまだ尽きないほどの、忘れられない規律がたくさんありました。

ただ、不思議なことに、さほど愉快とは

言えない生活の中で身についた習慣ですが、これらは今なおわたしの中に残っています。

「何も覚えていないなあ」と言う息子に、たとえ覚えていなくとも、来年も、再来年も、ずっとずっと、8月6日におばあさんから冷

たい水ももらったことを話していると思います。8月6日は平和祈念の節目の日であるのはもちろんですが、見知らぬおばあさんが私たち家族に平和を教えてくれた記念日です。今なお、わたしが下駄箱の靴の向きを変えられないのと同じく、繰り返し伝え話すことで、「8月6日は広島にいな

くては」という感覚を育み、そして今はもう記憶にないおばあさんのその姿を、思い描き、広げることのできる青年に息子が育ってほしいと願います。

さて、平和祈念式典には、広島市が各国の在日大使に招待状を送っているようですが、東京のハンガリー大使館から出席される場合もあれば、やむなく欠席されることもあるそうです。そんな時、大使館からは必ず献花が届けられます。ハンガリーの平和への思いをお手伝いできるならと思い、献花の依頼があった時は、必ず同行しています。平和な国への安心感がないかぎり、わたしのようないわゆる「国際家庭」が幸せに暮らすのは難しいと思うからです。

日本から離れていると、ヒロシマやナガサキのことを直接に知る機会が少ないかもしれません。今年は、ブダペストでも「ヒロシマ・ナガサキ原爆展」が開かれています。写真パネルや、被爆者の遺品などが10月31日まで展示されています。この展示は世界各国で、20年以上続いているものだそうですので、在ハンガリーのみならず、ぜひ足を運んでみてください。

(ひばら・みゆき)

ピックアップインタビュー

ハンガリー・ダンスアカデミー 丸山 穂高(まるやま ほだか)

聞き手:桑名 一恵

Q) ダンスやバレエを始めたのはいつ頃?きっかけは?

A) 妹が習っているのをみて僕もやりたいなと思い6歳からバレエを始めました。やればやるほど、「踊るのが楽しい」と感じるようになりめり込んで行きました。バレエスタジオに所属して文化センターなどで発表したりしました。

Q) 本格的に、この世界を目指そうと思った理由は。

A) 12歳の頃にアメリカで行われたYouth America Grand Prixというコンクールに出場し、世界中のダンサーを観て憧れました。特に同年代からは大きな刺激を受けましたし、プロダンサーの演技を見て「こうなりたい」と、はっきり目指すものが見えた時期でもあります。

Q) ハンガリーへ決めたのはなぜ。留学の目的などを聞かせてください。

A) 高校卒業後、海外で勉強したいと強い思いがありました。卒業を前に受けた京都で開催されたバレエコンクールで、現在通っている学校のスカラシップ(奨学金生)の資格を頂きました。同時期にイギリスへの可能性も出てきたのですがハンガリーの学校が国立だった事や国自体も過ごしやすそうな印象があったので、同年7月に実際に同校のサマーコースに参加し、周りの環境も実際に自分の目で確かめてから入学を決断しました。

Q) いつからハンガリー・ダンスアカデミーに在籍されて、実際にどういったことを学ぶのでしょうか。難しい面、興味深い面、日本との違いはなんでしょうか。

A) 2016年9月からです。学校にはバレエ科、モダン科、ハンガリアンダンス科、教師過程の4つのプログラムあります。僕はバレエ科に入っており、バレエ、パドドゥ(男女ペアで踊る)、モダンダンス、インプロビゼーション、社交ダンスなどを学んでいます。最初は、英語もあまり通じないと聞いていたので、とにかく何をやるのかドキドキしながら対応していたのを覚えています。今まで社交ダンスは踊ったことがなかったので、習得できる良い機会だと思う反面、やはり難しく踊り切るには、まだまだ乗り越えていけないとわからない壁がたくさんあります。基本的に男女別クラス。パートタイム生である僕の場合は朝にバレエのレッスン、その後「レパートリー」と言って、振り付けの付いている作品やモダンバレエ・即興ダンスなどのレッスンがあります。「パドドゥ」と言って女の子を持ち上げて踊るようなレッスンもあります。ここまでが午前中のプログラムで、午後からは自主トレになり、筋トレなどを取り入れた体作りに励んでいます。僕は今年9年生と言う最終学年なのですが4名の外国人クラス(日本人2名、イタリア人2名)にいます。

ハンガリー人やヨーロッパの同学年のダンサーたちは、とにかく立っているだけで綺麗です。特にこの国立バレエ学校の生徒は1年生の頃から基礎を丁寧に教えてもらっているせいか、本当に立ち振る舞いが綺麗で羨ましくなります。立って表現する各ポジションをとること一つとっても、そのポジションに入れていく事だけでも技術が必要で申々決めていけないものが、こちらの皆さんは、ずっと形をとっていき事が出来る。体格の違いもさっておきながら、どれだけの基礎を身に付けているのかということに目が行ってしまいます。

Q) ハンガリー国内外で公の場での発表の機会や、私たちが在任者が鑑賞できるような公演などはありますか。

A) 学校内にも舞台がありパフォーマンスの機会が多いです。またMŰPAやVárkert Bazar、ブダペストを抜け出して地方都市にも公演に出かけたりします。もうすぐシーズンも始まりますが「くるみ割り人形」では、昨年「ロシアの踊り」という重要な役を踊ることも出来て、更に向上心が高まりました。バレエアカデミーでは、僕たちに様々な役割を与えてくれて練習の成果を実際に披露することが出来るので、その度に何が大切なのか、これからの課題なども含めて確認出来る良い機会でもあります。勿論、与えられるだけでなく僕たちは、それに応えられるように日頃からレッスンを重ねて行くのですが心身共に成長していける良いチャンスだと思っていますし、卒業後のプロダンサーとしての道に向かって行く一つの過程でもあるので、一瞬一瞬を逃さないように心がけています。一般の方に見てもらえるようなプログラムもあり、公演内容は学校のホームページやFacebookでも舞台の情報が載っていますので見て頂いて足を運んで頂けたら、とても嬉しいです。

Q) ハンガリーのバレエや現代舞踊など指導・技術面などの大きな特徴や日本の違いはありますか。

A) 学校では「ワガノワメソッド」で教えてもらっています。僕の担任はロシア人なので英語クラスを受けていますが、ハンガリー人の先生の時には基本ハンガリー語で少し英語を混ぜて話してくれます。とてもポジションに厳しく、対応に苦労していますが、その分、形、基礎をしっかりと叩き込んでくれるのでとても勉強になります。

また面白いことに先生方が、たまにバレエの動きをハンガリー語で例えて言ってきます。例えば、くると回る動きがpalacsintaの様なので、その動きを「パラチンタ」と名付けて、「そこからパラチンタして～」と指示してきます。確かに想像しやすいのですが、どうしても笑みがこぼれてしまいますね。

バレエやダンスレッスン以外にも例えば、他の学生たちは音楽史

やスポーツ生理学などの体の仕組みについても学び、実技だけでなく更に幅広い知識を習得し、演技の幅を広げていきます。僕は、体作り中心で体幹を中心に鍛えています。

Q) ハンガリーの印象や住み心地やハンガリー人との交流・文化の違いや語学・食生活などはどうですか。

A) ここに来た時、「芸術の町」だなと感じました。去年、外にピアノが置いてあって普通に歩いていた人たちが、いきなりピアノを弾き始めたのを見て驚きました。また良い舞台が安価で観る事が出来ることを知って、オペラやコンサートにも足を運ぶようにしています。とにかく日本では考えられない状況にびっくりしました。

クラスのハンガリー人の友達とも良く遊びますが、最近温泉に行って全く知らないハンガリー人のおじちゃんおばあちゃんと会話？するのを楽しんでいます。当然、ほとんど理解出来ませんが、こういう交流がとても楽しく、いい息抜きになります。一人の時間も大切にしています。スタジオでレッスンの後に一人で「無」になる時間を過ごしたり、家でもリラクゼーション出来る環境を作るようにしています。

自炊を中心していますがハンガリーの食べ物は、どれも美味しくダンサーである事を忘れてしまいます。殆どの気に入ってしまっていて食べていますが、中でもクルトウシュ・カラーチとラーンゴシュが大好きです(笑)。

Q) ダンスアカデミーに来て思うこと。

A) 先生方も親切に接してくれて、自分の質問にも、とても丁寧に答えてくれます。

ですが、自分から動き出さないと何も得る事はないと感じています。

自分が動き始めると、周りは本当に、いい方向に導いてくれる事を実感しています。

アカデミーの立地条件も良く、住む場所も幅広く可能性がある事や、やはりこの国



の住み心地の良さが僕自身の決定打かなと思います。ハンガリー人の学校の仲間や留学生も本当に助け合える同志たちです。何かあれば手を差し伸べてくれます。

そういったネットワークの良さも、この学校の良い所だと思います。

Q) 今後の目標やプランニングは。

A) 後1年学校で勉強します。今は来年6月に行われる卒業公演に向かってプログラムが決まりつつあり、配役も決まり始めてきましたので、それに向かって始動しました。

卒業公演では女性ダンサーと踊る「パドウドウ」を踊れることになり、これは僕にと

っても大きな目標でもありましたので在籍している間に、しっかりと技術を上げて固めて行って本番を迎えられたらと思います。それから、やはり語学力をもっと高めたいかなと思います。バレエの専門用語自体はフランス語やロシア語を使いますが、説明などはほとんど英語を使ってレッスン中のコミュニケーションをとっています。学校でハンガリー語の授業があるのですが、担任の先生がロシア人の先生ということもありクラスでは英

語が多いので、まずは英語から話せるようになるという目標があります。卒業後は、クラシックスタイルを好んでいるので、ヨーロッパの中でも特に現在でも大切にクラシック作品が定着し残っているバレエカンパニーで活動していきたいと思っているので、ハンガリー国立バレエ団を始め、東ヨーロッパを中心とした各国のバレエカンパニーのオーディションを受けて行きたいと思っています。そしていつか、その所属先で「海賊」や「ドン・キホーテ」を踊ってみたいです。

(くわな・かずえ)

エクソフォニーと違和感と 文学研究

Tóth Julianna Nikolett

ちょうど半年間日本に住んでいるハンガリー人の私は、大学の同級生、バイトの同僚、友だちなどから最初にいつも同じ質問をされる。「なぜ文化も距離もずいぶん離れている日本に興味があるのか。何をしに来たのか」。

今は考えなくても答えが口から出てくる。「私はもともと世界文学に興味があり、英訳文またはハンガリー語訳文で現代日本文学を読み始めた。とても面白く原文でも読みたいという気持ちが高ぶったので日本学科で日本語や日本文化を専門として勉強し始め、今は現代文学を研究しに日本に来た」。こんな風に答える。そうすると、現代日本文学って、いったいどういうものを研究しているのかとまた聞かれる。

現代日本文学という言葉を知ると、皆さんはどういう想像をするのだろうか。村上春樹や、吉本ばななや、江國香織が浮かぶのではないだろうか。それはたしかに現代日本文学だが、現代日本文学の魅力的な作品はこの作家たちのものだけではない。

「日本亡命文学」と返事をする。時には、「移住作家の文学研究だ」と付け加える。この時、大体の場合、会話が止まってしまう。相手がよくわかっていないことは明白である。「ぼうめいぶんがく」とか、「いじゅうさっか」という言葉は、聞くだけで漢字を見ないとその意味がわからない場合が多いようだ。または、もしかしたら自分の外国人風のアクセントがちよっと変なのかもしれないと思い、詳しく説明してみる。

今の私の研究テーマは多和田葉子が日本語で書いた短編小説である。多和田葉子は日本に生まれ、22歳の時にベルリンに引越し、移民としてそれからずっとドイツに住んでいる作家だ。母語の日本語でも、外国語として学んだドイツ語でも、小説を書いている。そのようなことを言って説明する。それでも、分かってもらえない場合が多い。

文学研究者の間では多和田葉子の名前は有名で、彼女の作品に関する論文は英語、ドイツ語、日本語などさまざまな言語で書かれている。最近研究テーマとして広がっている「移民文学」、あるいは「亡命文学」の代表的な現代日本女性作家である。多和田自身も亡命文学の異質性や創造上の魅力に関してエッセイや論文を書いたりする。

移民文学、あるいは越境の文学は英語ではmigrant literatureあるいはborder-crossing literatureと呼ばれる。これは1980年代から始まったもので、日本人の中にも、移住民であり、バイリンガ

ルな存在として、越境的な特徴を持つ作品を書く作家たちがいる。日本語で書いている外国人の中ではリービ英雄、外国語で作品を書いている日本人作家の中では多和田葉子が一般的に知られているだろう。

多和田葉子は上記のように、昭和35年(1960)に東京に生まれ、22歳の時にベルリンに引っ越した。最初はドイツ語をあまり知らず、毎日の生活も一苦労であった。しかし、ドイツ語を母語とする人が毎日使っている自然な表現、ことわざなどを、多和田は、まるで周囲の大人の話している言葉を聞いて初めて言語を習得する子どものような立場から理解した。それは、多和田にとって新鮮な感覚だったようだ。子供の時に母語を学ぶプロセスを、外国語を勉強し始めた大人が経験したということは、確かに衝撃の体験だったと思う。

多和田葉子は短編集、長編集、小説、エッセイなどを書き、さまざまな賞を受賞している。テーマは、異文化から来た主人公、コミュニケーション、非母語話者が使う奇妙な言葉使いや、それを含めた言語そのもの、あるいは、移民や社会問題などである。海外に住んだことのある者にとって、これらのテーマは全部よく知っているものだろう。外国に住み、自分が伝えたいことをちゃんと説明できないもどかしさを抱えながら、日常生活の問題を解決していく。違和感があるところに住み始めると、驚かされることが多く、自分の母語とは何か、文化とは何か、などの疑問が頭に浮かんでくる。そんなときに思い出されるのが多和田葉子作品のテーマなのである。

1993年に芥川賞受賞作品になった『犬婿入り』は、21世紀を舞台にした異類婚の物語である。主人公の北村みつこは、39歳の独身女性である。塾の講師として働きながら、多くの不思議な行動をとる。この都市では移住民であるみつこは、ポーランド語で本を読み、塾の授業中に「犬婿入り」などの変な民話を教え、鳥糞で肩の痛みを治し、近所に住んでいる母親たちの普通の日常生活を乱す。みつこはヒッピーであったなど、いろいろな噂が広まる。ある日、イヌマ太郎という男がみつこのところに来る。彼はあまり話もしないまま、みつこと交わる。イヌマは犬に似ているうえ、みつこが教えた民話と大体同じことが起こるので、これは現代の「犬婿入り」民話だろう。また、太郎もみつこも移住してきた存在である。この作品は、異なる存在への認識や日本社会の問題を表していると言える。

『エクソフォニー — 母語の外へ出る旅』は、さまざまな町を列車で通過するたびに感じる語り手の反省や思想などが書かれているエッセイ集である。この作品でも、多和田の言葉や言語に対する繊細な感性がよく現れる。この本はただ海外に旅行した経験がある読者にとっても面白いかもしれないが、外国に住んでいる読者にとってはさらに興味深い本だろう。

ほかにも、多和田は『雲をつかむ話』、『言葉と歩く日記』、『傘の死体とわたしの妻』など、数多くの不思議な世界を表している作品



を母語の日本語で制作した。一方で、ドイツ語でもさまざまな作品を書いている。

村上春樹が外国で一番よく知られている日本人作家であることは間違いないと思う。江國香織のように、日本では有名だが海外ではよく知られていない作家も多々いる。多和田葉子は、日本人の間ではそんなに有名ではなく、どちらかと言えば海外で知られている作家である。多和田作品は日本語で書かれているが、ドイツ文学が好きな読者のほうが、日本文学が好きな読者よりも気に入るかもしれない。現在移住民である私にとっては、一番興味深い作家だ。海外に住んだ経験がある日本人の皆様にとっても、きっと面白い作品であると私は信じている。

なぜ文化も距離もずいぶん離れている日本に興味があるのか。何をしに来たのか。あまり役に立つ質問ではないと思う。返事も大して面白くない。私は毎日、次のような質問を自分自身に問う。「こ

れから、外国人の日本文学研究者として、この奇妙で魅力的な現代日本文学作品を理解するために、私はどう研究をしていけばいいのか」。その回答として頭に浮かぶのは、私はエクソフォニーと違和感のおかげで、日本人の知らない、あるいは日本人にはあまり興味を持たれない現代文学の価値を見つけ、研究することができるということだ。日本国内の国文学研究は、ほとんどが日本語を母語とする研究者によって行われている。しかし、現代文学の場合は、さまざまな「違和感」の現象が扱われている。新鮮な視点を持ち、自国の文学伝統との比較研究などもできる、日本語を外国語として学んだ研究者も必要ではないだろうかと思う。つまり、外国人が日本文学を研究する意義はこれではないだろうか。さらに、日本人と外国人の研究者が協力すれば、きっと魅力的な研究が可能であると私は思っている。

(トート・ユリアンナ・ニコレット)

留学生vs.大阪弁

Ujlaki Alexandra

ELTE大学で日本語を勉強しているウイラキ・アレクサンドラと申します。2016年9月からおよそ1年間大阪大学で留学しました。

大阪と言えば、何が思い浮かぶでしょうか。美味しいたこ焼き、賑やかな道頓堀、いつでも飴“ちゃん”をくれる優しいおばあさんかもしれません。生活はすごく楽しいし、困ることがない都市というイメージを持っている人が少なくないと思います。しかし、私たち留学生にとっては一つ問題がありました。何かというと、教科書の日本語と大阪で話されている日本語がだいぶ違うということです。自分が言うことは通じますが、大阪弁をなかなか理解できません。それでも、私は大阪弁が大好きです。では、大阪弁についての経験を紹介したいと思います。

何年前か、大阪を舞台とした「ラブ★コン」というドラマを見て、俳優さんの話し方がすごく気に入りました。なぜかという、大阪弁は楽しくて、大阪人は親しみやすいと感じたのです。ハンガリー語の字幕があっただけで、たけれど、「あほ」や「ほんまや!」しか聞き取れなかったもので、話せるようにはなりません。もっと知りたかったのでGoogleで検索してみました。しかし、Wikipediaの説明はあまりにも複雑で勉強になったとは言えません。やはり大阪でしか大阪弁を覚えられないと分かって、日本学科に入学してからずっと大阪に行きたいと思っていました。

大阪に着いた日はひどい台風でしたが、毎日、大阪弁を聞くことを楽しみにしていました。でも、大阪人はすごく早口で話している気がして、最初は周りの人がいったい何を言っているか全然分かりませんでした。それで、大阪弁の授業に登録して、クラスメイトのみんなと一緒に何回も何回も「チャウチャウ(違う違う)」や「何言う

てんねん」や「気いつけて」などの大阪っぽいフレーズを練習していました。文法も頑張って勉強して、段々大阪弁に慣れてきました。しかし、そんなに簡単に話せるようになるわけではありませんでした。どうしてかという、大阪弁の最も大きな特徴はアクセントで、京阪式アクセントが出来なかったらどんなに頑張っても話し方はおかしくなってしまいます。

私たち留学生が勉強している標準語は東京式アクセントで、違いが大きいのです。だから、やはり大阪弁を上手に話せるようになるために標準語を捨ててアクセントを習い直すか、大阪弁を諦める

かという問題になりました。でも、標準語を捨てようと決めたら、関西で話すなら大丈夫ですが、帰国すると困るかもしれません。どうしたらいいか、散々迷った末に、いい方法を見つけました。話す時には標準語を使って、相手が大阪人だったら少しだけ大阪弁も入れます。一方、書く時にはアクセントが関係ないので、もっと自由に使えます。

大阪大学では楽しい勉強だけでなく、授業のために研究もやってみました。様々な興味深いテーマがあっただけで、選ぶのは難しかったのですが、私は最終的に大阪弁の存在表現にしました。標準語の「いる」という動詞は大阪弁で「いてる」か、「おる」か、「いる」になります。アンケート調査の結果、使い分けは性別

と年齢によって違うということがわかりました。まだわからないところがいくつもあります、大阪弁に興味があるし、勉強と研究を続けたいと思います。

最後に一言:大阪、好きやねん!

(ウイラキ・アレクサンドラ)



Midorino oka

みどりの丘日本語補習校

バ

ザ

ー

Bazaar



日時



2017年11月25日 (土)



13時～15時



手作り小物
雑貨・食器
大人・子供服



靴
和食
書籍・DVD

場所：ブダペスト2区 Törökvész(トゥルクベース)小学校内
1025 Budapest Törökvész út 67-69

目指すは「ゆったり観察」

渡辺 薫

今から遡ること数十年。「明日から夏休みだ!」机の中、ロッカーにかけてあるもの、上履き、給食袋などを両手に抱え、家路を急いだ1学期最後の日。東北は山形で育った小学生の頃の私には1ヶ月足らずの夏休みでしたが、その頃の私には、そのスタートはいつも永遠に続くパラダイスの始まりのように感じられました。

普段なら朝6時半に起きて、たいして食欲もないのに朝ごはんをとりあえずお腹につめこみ、決められた時間までに登校して、授業を受けて、そして毎日の宿題や習い事をこなします。そんな日常からしばし解放されるのが夏休みです。海だ、キャンプだ、祭りだと、様々な行事に毎日が期待でいっぱいです。花や木、草の色が濃さを増し、いつもより濃厚な時間がゆっくり流れている感じに浸ることもできます。

一方、現在2人の娘の親となった私は、テレビにかじりつく子供を叱り、宿題やらせなくちゃとイライラを募らせ、この日は誰に預かってもらおうかと頭を悩ませ、毎日続く暑さにぐったり。それでも、せっかくの夏休みなんだから子供たちを外の空気に触れさせようと、公園や行楽地に足を運ぶ生活をなんとか送っているのです。

そんな折、補習校から出された夏休みの宿題のリストを見ると「かんざつ名人になろう」という項目が目にとまりました。生き物や植物を観察して、その長さや形、大きさ、色などを詳しく自分の言葉でまとめる宿題です。夏休みと言えば、自由研究、そして何かの観察など、「ある対象をじっと見つめる宿題」が課されるのがやはり伝統のようです。テレビの前でくつろいでいる娘と、白紙の宿題を見て、私はまた焦りました。「何のことを書こうか。ばあちゃんちでクワガタ見つけて飼ってみたけど、そのことにする?教科書にはカタツムリが葉っぱを渡るところが書かれているけど、どうする?」。ま

るで、「自由研究どうしよう〜」と泣き泣きオジギソウを観察していた昔の自分に戻ったようです。そして、「観察」は後回しになったまま日々は過ぎていきました。

ところがある日、娘が自宅の水槽で飼っているカエルを見ながら涙ぐんでいるのを発見しました。水槽の中のカエルたちは、今年の夏の初めに卵から孵り、私が子供たちを連れて実家に帰省している間に、オタマジャクシから成長していたものでした。

「どうしたの?なんで泣いてるの?」

「…だって、このちっちゃいカエルかわいそうなんだもん。足がびよーんって伸びて、なかなかうまく飛べなくて…。でもがんばってジャンプしてる」

はっとしました。娘はこの指先ほどの小さなカエルの命と、卵の頃からじっくりと向き合い、自分の目と心でずっと観察を続けていたのです。たくさんのオタマジャクシがカエルに成長したものの、中には足の曲げ伸ばしが不自由なものもいて、彼らはえさにありつくのもなかなか難しいようなのです。娘はそれらにちゃんと気づき、不憫に思ったのでしょう。部屋の真ん中に、一時的に置いてある水槽を、掃除の邪魔だなあくらいにしか思って興味を持っていなかった私ですが、そのときは一緒に水槽を見つめ、一緒にカエルを観察してみました。そして、寝ているカエルがどんな姿勢をとるのか、どんなふうに目を閉じるのか、どんなふうにジャンプするのかなど、娘の言葉に耳を傾けてみました。

そして気づきました。いつまでも観察の余裕をもてないのは、日々の生活に追われる大人の私だったのです。思えばこの夏、娘はいろいろな対象を鋭い観察眼で見つけていました。家庭菜園のナスやトマトが日々大きくなり色づき、その収穫の時期を教えてくれるのも、大雨の前にアリが行列を作って歩くことにいち早く気づくのも彼

女でした。

さらに、身の回りで起きていることだけではなく、自分の心の中もじっくりと観察していました。「お父さんはハンガリー人で、お母さんは日本人で、自分はなんだろう」。アイデンティティに関する疑問は、思春期あたりに湧き上がるものと勝手に思い込んでいましたが、もうすぐ8歳を迎えようとしている娘の口からこの言葉を聞いたときに初めて、娘が周囲の人間関係を観察し、こんなふうに心を悩ませていたことに気がついたのです。

それからは、お風呂でリラックスしているとき、寝る前に本を読み聞かせた後など折を見て、彼女の「今日の観察」に耳を傾けることを(なるべく)心がけています。

毎日決まった時間に起きなくてもいい夏休み。ちょっとくらい食事の時間がずれて、文句を言われなくてもいい夏休み。だからこそ、疑問を持って立ち止まり、それと真正面から向き合うことが許されるのだと思います。そんな夏休み、小さくても確実な成長や、子供の真剣なまなざしに気づくことができる「観察名人の親」になる意識、余裕を持つチャンスを与えられているのかもしれない。今、日本では夏休みが短縮される動きがあるようです。親にとっては、預ける場所に頭を悩ませなくてもいいというメリットがあるかもしれませんが、何か、親子共々貴重な時間を失ってしまう気がして寂しい限りです。こちらハンガリーに住んでいると、夏休みの最後には「もうそろそろ学校始まってもいいんじゃないかなあ」なんて思ってしまうのですが、休みに飽きてしまうぐらいがちょうどいいのかもしれないですね。今、また新学期が始まりました。毎日の生活は、やっぱりどたばたしています。充分長い休みをとらせてもらいましたが、やっぱり夏休みがちょっとだけ懐かしいです。

(わたなべ・かおる)

思い出の夏と今年の夏

岡本 聡子

思い返せば十数年前、5年弱勤めた会社を退職し、夫の住むブタペストに移り住んだのは、遠い昔の初夏の頃でした。ブタペストから離れた夫の実家へ向かう車の窓から見えた可憐な赤いポピーの花が新緑の中でひときわ目立っていたのが印象的でした。山のない平坦な土地は道が真っ直ぐ伸びブタペスト市内とはまた違う素朴な風景が広がっていました。今でもあの花を見かけると当時のことがふっと頭を過ぎります。あの当時はブタペストの夏は日本と比べると随分快適で、むせ返るような暑い日本の夏が耐え難かった私にとってブタペストに越してきて良いことの一つに夏が快適であると思ったくらいです。

それから十数年たち3人の子どもの母になった私は、あの頃、花を眺めていた当時の気持ちの余裕もどこえやら。夏が近づくと長い夏休みをどのようにしたら子供たちが楽しめるのか、来週は何処に預けようかとそのようなことばかり考えています。私が子供の頃、母は専業主婦でした。学童保育もありましたが通っているのはクラスでも数名だったような記憶があります。そんな私の母は預け先に困ることはなかったものの子供が休みの間は3度の食事の支度が大変だったと後になって聞きました。それに24時間子供と一緒にというのも気力、体力のいることです。そんなことは当時の私はつゆとも知らず、私にとって夏休みの出来事は良い思い出として鮮明に記憶に残っています。泳いで真っ黒に日焼けしたこと、疲れて畳の上でお昼寝したこと、地元のお

祭り、花火大会、お盆の帰省、そして夜更かし、ちょっと記憶を辿れば数え切れないほどの思い出が次から次に蘇ってきます。夏休みの宿題をのぞけば何も心配事のない平和な夏休みでした。

気がつけば 今の私は昔の母の立場になってしまいました。日本より更に長い夏休みを、仕事もしながら子供たちの世話もしていかなければならない何とも難しい立場です。そんな私にとっては少々やっかいな夏休みですが、子供たちにとっては待ちに待った夏休みです。あれこれ考え、どうにか楽しい夏休みを過ごさせてあげたいと思うものです。

今年の夏で一番印象に残っているのは、小学校へ進級した娘を4泊5日のターボール(キャンプ)に参加させたことです。学校が主催しているのでなんだか信用もできるし、娘に話をすると一つ返事で行きたいとのこと。「初めてで5泊かあ」、とちょっと考えていた私ですが、娘はその長さを理解しているのか、してないのか、ターボール＝外泊という言葉に喜んでいるようでした。1年生からでも参加できると書いてあるし、本人もその気なので思い切って参加させることにしました。説明会に行ってみたものの、毎日プログラムがありなかなか楽しそうです。先生も10人の生徒に対し先生が1人付くらしく説明会に出席して少し安心しました。忘れ物がないように荷造りをし、娘と一緒に荷物を一つ一つ確認しました。荷物のことを色々説明しましたが本人は理解しているのか、いないのか。出発の当日、時間どおりに機嫌よく起き、心配よりも期待に

溢れた様子の子の娘の姿に対し、言葉には出さずとも明らかに心配そうな私達夫婦。携帯電話は持たせなかったので夕食後に先生の携帯に電話して娘に繋いでもらい話をすることもできましたが、逆に連絡を取らないほうが良いだろうと思い連絡も取りませんでした。

その娘がいない4日間、子供が2人ってこう言う感じなのかなあ、やっぱり1人いないと楽だなあとしみじみ思いながら過ごしました。最終日の金曜日にブタペストに電車で到着予定であった娘を夫が迎えにいつてくれ、そこからまだ工作中だった私に電話で無事着いた連絡を貰った時はさすがに一安心しました。

今年の夏もなんとか乗り切りましたが、また娘が大人になり子供時代の夏休み良い思い出として記憶に残っていてくれれば良いなあと思います。

(おかもと・さとこ)

錦織選手の再起を祈る

盛田 常夫



手首の腱の部分切断はテニス選手にとって、致命的な怪我である。

錦織選手より1歳年上のデル・ポトロ選手は、2009年に弱冠20歳でフェデラーを破り全米オープンタイトルを獲得した。この試合に負けたフェデラーが涙を流したのを良く覚えている。セットカウント2-1でリードしたフェデラーの史上初の6連覇かと思われたが、捨て身のデル・ポトロ選手のパワーショットが炸裂して、プレーのレベルが落ちたフェデラーから2セットを連取して優勝するという劇的な展開になった。この試合を契機に、フェデラー選手はグランドスラム大会の優勝から遠ざかったという意味でも、因縁深い試合だった。実際、フェデラーはこれ以後、全米オープンのタイトルをとっていないし、ここから絶対王者の陥落が始まった。あたかも全米オープンのデル・ポトロ戦がトラウマになったかのようである。当時の錦織選手はデル・ポトロ選手のパワーにまったく歯が立たなかった。

誰もがデル・ポトロ時代が来ると思ったが、しかし、その後、定期的に両手首を痛め、試合に出たり棄権したりする日々が続く、世界ランクは急落してしまった。今もなお、手首の状態と相談しながら、テニスを続けている。

デル・ポトロ選手の場合は、パワーがありすぎて、手首に負担がかかったと思われる

る。強烈なサーブ力やストローク力を持つ選手は、定期的に肩を痛めたり、肘を痛めたりするから、パワーに頼りすぎるテニスは故障のリスクを常に抱えている。

逆に、錦織選手の場合は、同じ体軀の選手と比べても体の作りが華奢で、パワーテニス時代にあって、腕にかかる負荷をどうやって凌いでいるのか心配していた。多くのテニス関係者も、錦織選手が小さな体でトップテンを守っていることに驚嘆していた。どう見ても地肩は強くなく、腕の節も強そうには見えない錦織選手の手首や肘にかかる負荷は、相当のものだろう。案の定、デビューして間もない時期に、肘の故障で1年ほど休んでいる。その後も、脇腹、臀部、足首などの故障は定期的にあつたが、これらはテニス選手にとって致命的な故障ではない。しかし、肘や手首はテニスプレーヤーの致命的な箇所だから、中途半端な状態で試合に臨むことはできない。腫れが退いてから腱の再建手術になるのかどうか分からないが、ここは徹底して治療しないと再起は難しい。

手首や肘の腱が断裂する時には必ず前兆がある。疲労で重い感じがした時には、疲労が取れるまで、手首や肘を休めなければならない。そこを無理すると、腱が切れる。その予兆を深刻なものとして受け止まず、サーブの練習を続けたのだろう。それが重大な結果を招いた。

錦織選手に限らず、トップテンの選手で故障を抱えて長期休養する選手が、これまでに多く多い。明らかに選手の疲労が蓄積している。グランドスラム大会に次ぐATP1000のマスターズ大会が、連続して開催される時期が何回もある。8月のロジャーズ・カップで優勝した次代のチャンピオンと目される20歳のA. ズヴェレフは、翌週の同じくATP1000大会のシンシナティ・マスターズでは緒戦で世界ランク87位の18

歳のティアフォーに負けてしまった。「疲労困憊でどうしようもなかった」というのが、ズヴェレフの言である。

A. ズヴェレフ選手は2m近い身長でありながら、俊敏な動きができ、正確なストローク力をもっている。2mを超える長身選手はどうしても歩幅が大きくなり、俊敏な動作ができない。だから、ストローク力よりもサーブ力で勝負する選手がほとんどだが、ズヴェレフ選手は細身で体重がない分だけ、俊敏な動作ができる。しかも、長身からのサーブはパワーと角度がある。サーブピードは210km前後だから、錦織選手より3割ほど速い。ちょうど大谷翔平をテニス選手にした感じで、ズヴェレフ選手を見る毎に、ウエイトのある大谷選手がテニスをやっていたら、世界の頂点を狙えただろうなと思ってしまう。

ズヴェレフ選手の他に、18~20歳の有望な選手が台頭してきている。また、オーストリアの23歳のティーム選手も、ストローク、サーブともに素晴らしいものをもっている。サーブ力がない錦織選手はこれまでストローク力でトップテンを維持してきたが、若手選手は皆、ストローク力があってサーブ力もある。だから、錦織選手が怪我から回復しても、これらの若手相手の試合はタフなものなることは間違いない。しかも、年



上のレジェンド4強は当面は引退しないだろうから、錦織・チリッチ・ラオニッチの狭間の世代は埋もれたままになる可能性が高い。

ただ、ズヴェレフ選手にしてもチーム選手にしても、最大の敵はライバル選手ではなくて怪我である。疲労が蓄積すれば慢性的な故障を抱えることにもなる。それは選手生命を左右する。怪我を抱え込み、慢性化すれば、トップを狙うことはできない。

プロテニス協会はATP1000の大会が連続しないような日程を組み、トップ選手の参加義務を緩和し、疲労を蓄積させないように配慮すべきだろう。そのためには、ランキングを決める年間ポイントに算入する試合数を限定するなどの措置が必要になる。一昔前のテニスと違い、現代テニスは強烈なパワーが炸裂するスポーツになっている。ATPのビジネス政策だけで、選手生命が縮まることを防ぐべきだ。

この点は、先の水泳世界選手権についても言える。FINA(国際水泳連盟)は競技のプロ化を目指しているように見える。選手の数が増え、限られているダイビング競技を導入して、観客を増やそうとしている

が、これは主催国に余分の財政負担を押しつけているだけで、予期した効果を上げているとは思えない。ダイビングの選手たちは世界のリゾート地でアトラクションをやっているプロである。もちろん、飛び込み出身の選手ではあるが、ダイビングをやっている飛び込み選手は数えるほどしかない。数日間使用するだけのタワーとプール設置のために、10~20億円の費用がかかる。もしかして、FINAは飛び込み競技を終えた選手に、ダイビングのW杯などを作って、新たな競技でプロとして生活が成り立つようにと考えているのだろうか。それともたんに、見世物的な競技を出し物にして、水泳競技の大衆化を図ろうとしているのだろうか。

さらに、シンクロナイズドスイミングに臨時の人工プールが設置された。これも水球競技会場を使えば、無駄な出費を避けられたはずである。しかし、FINAは豪勢な競技施設の建設を後押しした。今年のブダペスト大会はメキシコ市が大会を返上して開催を早めた事情があったのだから、もっと質素に開催すべきだったが、競技連盟は競技のアピールのために、出費を惜しまない国を

後押ししている。

世界選手権が終わった翌週からは、もう短水路W杯のシリーズが始まり、世界選手権のメダリストたちも世界各地で開かれる短水路大会に参加している。選手には休養する暇がない。いわば競泳のプロトーナメント化が始まっている。もっとも、短水路は選手の体への負担は小さいが、テニスと違って、競技時間が短いことも、短期の休息期間でも体が回復するのかもしれない。水泳選手がプロとして生活できる道の一つかも知れないが、水泳連盟の営業政策と選手の生活や選手生命との微妙な関係が続いている。テニスのような深刻な問題が発生するまでに、もう少し時間が必要だろうか。マラソンの川内優輝選手のように、大会参加を練習の継続のように考える時代に来ているのかもしれない。それがスポーツのプロ化の道なのだろうか。

(もりた・つねお)

編集部よりのお知らせ



「ドナウの四季」のHPが完成しました。これまで掲載されたすべての原稿を読むことができます。 <http://www.danube4seasons.com>

皆様の原稿をお待ちしています。エッセイ、ハンガリー履歴書、自己紹介、サークル紹介などの記事をお寄せください。提出いただいた原稿は、紙面統一の編集のために修正することがあります。修正した原稿は執筆者の校正をお願いしています。

原稿は電子ファイルで、morita.magyar@gmail.comへお送りください。Word文書あるいは一太郎文書をお願いします。EXCEL形式での提出はお控えください。写真および図形は別ファイルで送付ください。

ふれあい大運動会を終えて

坂井 圭子

9月3日(日)の早朝、我々日本人学校教諭は、アメリカンスクールの駐車場で頭を突き合わせて悩んでいました。今にも雨が降ってきそうな空、しかし、今はまだ降ってはいません。でも、教員全員が厚手のコートを被って、9月初めとは思えない寒さに耐えています。この天気では、ほぼ一日活動となるグラウンドでの運動会の開催は無理と判断し、体育館での実施を決めました。

そこから、全員が守備位置についたかのように準備にとりかかります。事前に打ち合わせていたとはいえ、ここアメリカンスクール体育館での実施は初めてのことであったため、現場でお互いが声をかけながら瞬時に決定していくことも多々ありました。フットワークの軽い教員が一丸となって動き、時間内に準備完了することができました。

8時半の集合時間を目指して、子ども達が保護者の方々とともに

集まってきました。グラウンドに比べると格段に狭い保護者席です。「お互い譲り合って、皆さんが参観できますようご協力ください」というアナウンスを致しましたが、素晴らしい日本人チームワークが発揮され、不便な状況をうまく乗り切っていただきました。ご協力いただきました参加者の皆様に、この場を借りて、改めてお礼申し上げます。

児童生徒も然りです。日頃の活動の成果を発揮するかのように、互いに協力したり思いやったりして行動する場面がたくさん見受けられました。当日、急に変更となったこともたくさんありましたが、子ども達は柔軟かつ機敏に対応することができていました。

初めての会場ではありましたが、このように参加者全員の協力を得て、本年度のふれあい大運動会も盛況の内に終えることができました。





私は初めて団長という役割をやらせてもらい、初めはどうしたらいいのかわかりませんでした。しかし、先生方や友だちにアドバイスをもらいながら練習を重ねていくうちに責任感を持つことができました。運動会前には各クラスで応援の練習をしている声がたくさん聞こえ、その甲斐あって本番は優勝することができ、とても嬉し

く感じました。当日は皆が必死に白組を応援している声が聞こえました。今年の運動会は皆が楽しかったと思っています。

白組団長 柴田 果凜

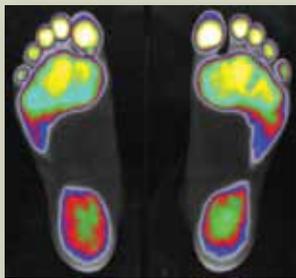
紅組の応援団長として、皆を引っ張る立場だったにも関わらず、短い練習時間を上手く使えなかったのに、皆はきちんと応援を覚えてついてきてくれました。たいへんだった団長を務めることができ、達成感を得ることができました。本番では後ろを振り返らなくても大きな声が聞こえてきたし、写真を見ると皆が大きく動いてく

れていたことがわかりました。そんなメンバーの様子を知り、団長になって良かったと感じました。残り短い学校生活の中で、この経験を生かしていけるように自ら行動したいです。

紅組団長 寺岡 愛実



足裏圧力測定から オーダーメイドのインソール制作

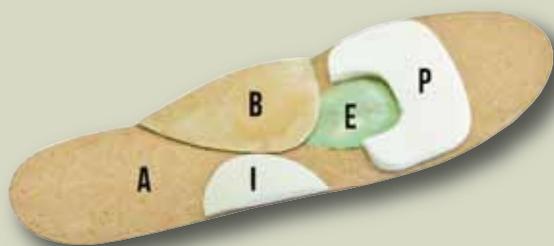
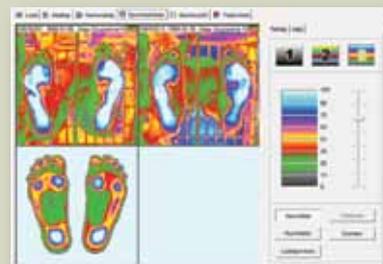
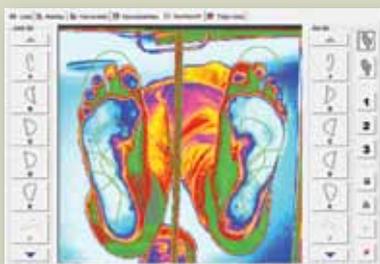


理想的な圧力図



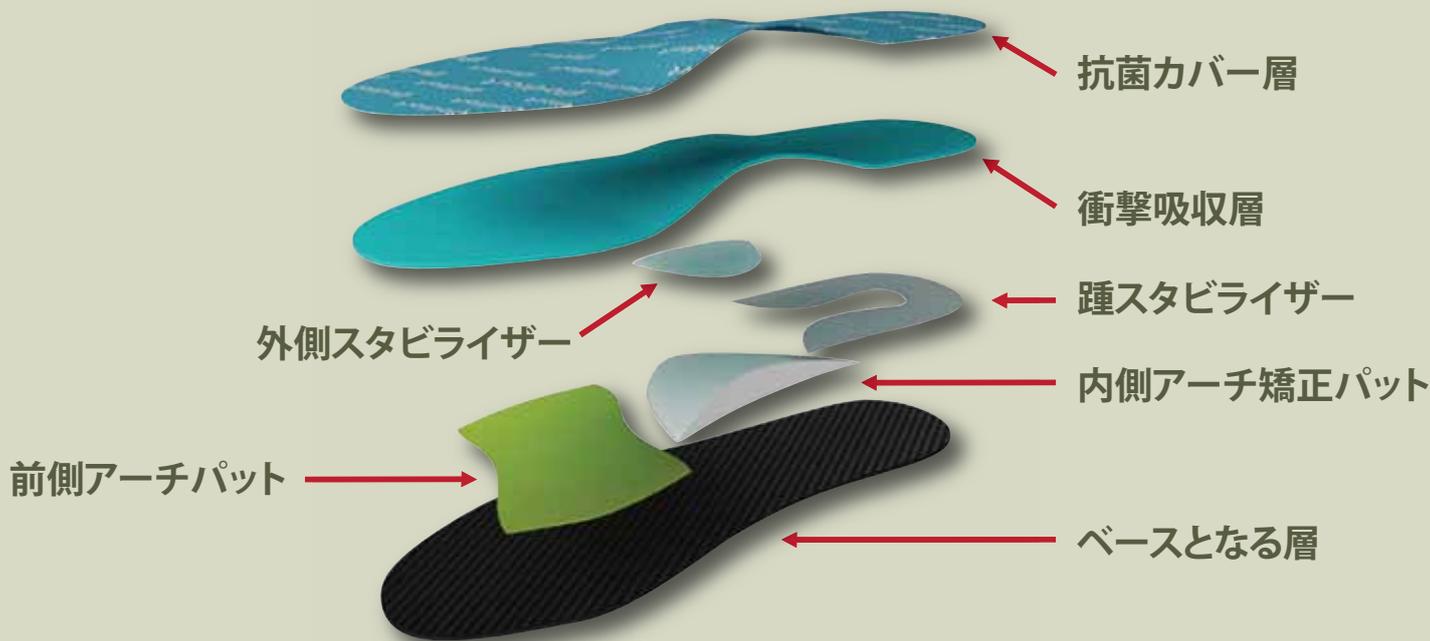
あなたの足裏圧力を
測ってみませんか？

自分にあったオーダーメイドの
インソールを造りませんか？



熟練したデザイナーが貴方に適した
インソールを作成し足裏圧力を矯正します

ハンガリーPodiart社が制作する オーダーメイドのインソール構造



Heat Therapy in Oncology—Oncothermia
New Paradigm in Hyperthermia
Andras Szasz and Tsuneco Morita

腫瘍温熱療法—オンコサーミア

ハイパーサーミアのパラダイム転換—医術から医学へ

サース・アンドラーシュ / 盛田常夫 [著]



日本評論社

温熱治療のパラダイムを転換する

温熱治療を根本から見直し、
あるべき手法を示した著書。

曖昧な日常知を科学によって解明した画期的な著作。

オンコサーミア治療器は世界25カ国で利用。
ドイツでは百か所以上のクリニックで、
韓国の主要な大学病院に設置。

好評発売中。定価3200円+税。
大手書店、Amazonにて購入可。

第4章 腫瘍温熱療法

- 4.1 腫瘍温熱治療の基本概念
- 4.2 ハイパーサーミアの手法
- 4.3 熱の作用と併用効果
 - (1) 熱と血流
 - (2) ハイパーサーミアの併用効果
- 4.4 ハイパーサーミアの熱生成
 - (1) アンテナ放射
 - (2) 磁場(コイル)
 - (3) 容量性カップリング
 - (4) 伝導加熱
- 4.5 ハイパーサーミア治療が抱える問題

第5章 オンコサーミアの理論と方法

- 5.1 電場の利用
- 5.2 細胞燃焼
- 5.3 腫瘍治療における細胞加熱
- 5.4 ミクロスコピック加熱
- 5.5 集束化の原理
- 5.6 温度の役割
- 5.7 安全性
- 5.8 積算量(ドーズ)
- 5.9 臨床事例

第6章 自然療法としてのオンコサーミア

- 6.1 ホメオスタシスの復位
- 6.2 細胞の自然死の促進
- 6.3 細胞転移の阻止
- 6.4 転移がん細胞に作用

第1章 ハイパーサーミアの歴史と評価

- 1.1 ハイパーサーミアとは何か
- 1.2 ハイパーサーミアの曖昧さと課題
- 1.3 ハイパーサーミアの歴史的概観
- 1.4 腫瘍治療のハイパーサーミア

第2章 ハイパーサーミアの物理学

- 2.1 電磁気学の基礎概念
 - (1) 電磁気現象
 - (2) 電場と磁場
 - (3) キャパシタ
 - (4) 位相シフト
 - (5) インピーダンス
 - (6) 電磁波
- 2.2 バイオ電磁気学
 - (1) 電磁波スペクトル
 - (2) バイオインピーダンス
- 2.3 「非熱」効果
 - (1) 非温度依存(NTD)効果
 - (2) 電磁場におけるNTD効果
 - (3) 電磁気による目標選択
 - (4) 電磁気と生体システム

第3章 ハイパーサーミアの生理学

- 3.1 生体におけるエネルギー、熱、温度
- 3.2 生体における温度制御
- 3.3 生体の加熱と体温
- 3.4 加熱による温度の分布
- 3.5 全身加熱と局所加熱の本質的な差異
- 3.6 加熱と冷却:リスクとその回避
- 3.7 温度測定と熱積算量(ドーズ)



コルナイが綴る 20 世紀中欧の歴史証言

池田信夫「21世紀最初の10年ベスト経済書」第2位にランク
「週刊ダイヤモンド」2006年ベスト経済書第9位にランクイン

コルナイ・ヤーノシュ自伝

—思索する力を得てコルナイ・ヤーノシュ【著】 盛田常夫【訳】

◆好評発売中！ ◆定価 4935 円（税込）◆A 5 判／ISBN 4-535-55473-0 日本評論社



体制転換 の経済学

黄色の教科書シリーズで知られる専門学
部の定番テキスト。体制転換の理論と転
換直後の現状を分析。各大学で教科書と
して使用。

盛田常夫著

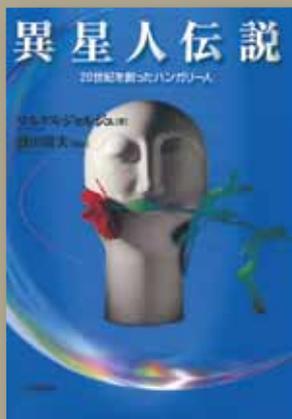
第一部 社会主義経済の失敗

社会主義崩壊をもたらした社会的退化への論理を構築。交換経済と再分配経済の
比較分析に新たな視点を提供。

第二部 ポスト社会主義経済

体制転換の過渡期の問題をすべて取り上げ、解決の道筋を示す。地域による体
制転換の違いを解明。

■ 新世社 新経済学ライブラリー20 定価2781円(税込)



なぜハンガリーは独創的な科学者を輩出したのか

20 世紀を創ったハンガリー人 マルクス・ジョルジュ【著】 盛田常夫【編訳】

■ 定価 3045 円（税込） A 5 判

■ ISBN 4-535-78331-4

異星人伝説

「週刊文春」(米原万里)、「週刊ダイヤモンド」(北村伸行一橋大学教授)で書評。
ハンガリーは 20 世紀の科学の発展に貢献した多くの頭脳を
輩出した。大きな足跡を残した科学者たちの評伝。

体制転換20年の歴史的・理論的総括の書

ポスト社会主義の政治経済学

体制転換20年のハンガリー：旧体制の変化と継続

新しい概念を駆使して、体制転換以後の中欧社会の状況を分析。

日本経済新聞(2010年3月21日)ほか、多数の書評。

旧来の定説を覆し、新たな知見を広める革新の書。

盛田 常夫著 日本評論社 定価3800円

